
吸血鬼に憑依しちゃった！！

ロリは正義

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

吸血鬼に憑依しちゃった！！

【Nコード】

N4959Z

【作者名】

ロリは正義

【あらすじ】

ごく普通(?)の高校生 紅月狂 はなんの変化も無い、いつも通りの生活を送っていた。

ある日、友人の家に遊びに来ていた時

「コンビニ行かね？」

と半ば強引に連れてかれる。

玄関を開けると何故か大きな穴ができていて、その穴に何故か友人に突き落とされてしまう。

一体狂はどくなってしまうのか!?

(この作品はそこまでシリアスなものではありません)

この小説は小説作品初心者の、作者の練習作品です。

そのため無理矢理な展開、文がおかしいなどのことがあります。

上記のものが嫌な方、TS物が苦手、反ご都合主義などの方はブラウザバックをどうぞ。

それでもよければ読んでみてください。

いちわ！（前書き）

毎日更新をめざします

いちわ!

- 主人公視点 -

僕の名前は紅月狂^{あかつきまわし} 16歳

どこにでもいる普通の男子高校生(かなり重要)。
特徴を挙げるなら動物に以上に好かれること。

身長が小学生ぐらいしかないこと・・・。
そして、よく女の子に間違われること・・・。
あまりこのことには触れたくないの、詳しくは語らないことにする。

そんな僕は、今日もなんの楽しみも無く、普段通り学校へ通い、その後友人の家に遊びに来ていた。

4

> 友人宅<

「うわ!! もう残機0だよ! ま、待って! あああああ・・・もう
終わったorz」

「STG下手すぎ(笑)」

今僕のことを馬鹿にしているこいつは親友の氷野冬樹^{ひのふゆき}

少し・・・だいぶバカなのが玉に瑕だけど、いつも困ってる時には
助けてくれるとてもいい友達だ。

そしてこいつには隠している能力がある。

僕も一度しか見たことがないが、これもまた後で語ることにする。

さて、今やっていたのは【東方project】というSTG。
数多くの球による華麗な弾幕が売りのゲームらしい。

ぼくはその東方projectの「紅魔郷」というものをやっていたのだが、下手すぎるせいかルーミアというボスで詰んでいた。

「いいさ、所詮ゲームだもの」

「おいおいwそんな言い訳見苦しいだけだぞ？w」
うるさい

「とにかく僕は、この手のゲームが苦手のようなだから仕方ないよ」

「まっ、それで納得してやろう。それより近所のコンビニまでジュース買いに行かね？」

慰めるかのように僕の肩を軽く叩きながら、冬樹はそう言ってきた。

「なんかむかつく言い方だな、でも確かに喉は乾いてるし、いいよ」

肩の手を払いながら、賛同の返事をする。

「よし、そうとなりや早速行こう！（グイッ」

「ちよっ、ちよっ！いきなり引っ張るのhいいからいくぞ！」おーいー！」

基本マイペースなこいつは僕の言葉を無視し、手をグイグイ引っ張ってくる。

「わ、わかったから落ち着いて！」

なんとか落ち着かせようとすも、まったく耳を貸さない冬樹。そのまま玄關まで引っ張られると

「ほらほら、早く靴を履いて履いて！」
なんだか少し焦っている様子で、汗を首筋に落としながら、背中を押し早く靴を履くようにいつてきた。

「（なにかあるのか？まあこいつはいつもこんな調子か）わかったよ・・・ほい、用意できたよ
よくあることなので、気にしない事にしてドアを開ける。

ガチャッ

「・・・はっ？」

開けてみると、そこにあつたはずの道路が無く、底が見えない、大きな穴が出来ていた。

「な、なにこれ・・・ねえ冬樹、見てよこれ

「
この穴を冬樹にも見て欲しかったので、後ろに振り向きながらそう
言つと

ドンッ！！

「へあ？」

突如襲う浮遊感、理由は冬樹の姿を見てすぐに分かった。

両腕を前にまっすぐに伸ばした状態。それは、だれかを強く押した後のような姿だった。

という事は

「なんで突き落とすんだああああ!!!!」

冬樹が僕を謎の穴に突き落とすということなど、簡単に分かる。
だがそれも後の祭り、抵抗虚しく僕は落ちていく。

「……………!!……………!!」

なにか冬樹が言っているが、なにを言っているのか、聞き取ること
は出来なかった。

「ウツ!!」

突如降ってきたなにかが鳩尾に入り、なにも考えることもできずに
そのまま意識を刈り取られた。

- 氷野視点 -

よう!みんな大好き氷野だぜ!

いや〜予定時刻が迫ってて、狂には何の説明もせずに突き落とすしちまったぜ

「わりーな！美女に頼まれたら断れなかつたんだ！」

そう一言伝え、目の前に野球ボールほどの氷の球を作り、狂が落ちていった角度にそれを力の限り投げ込んだ。

「ウツ！！」

見事当たったのか短い悲鳴が聞こえてきた。

友達としては心苦しいが美女の願いだ。反省はしているが、後悔はしてない。

さて、いいかげん狂を送ったことを伝えないと。そうしろって言われたし。

そう考え、俺は自分ちの、ある部屋の前にきた。

コンコン

ガチャッ

「私は神だ」

スパッツに上半身裸というなんとも気持ち悪いジジイが、羽織っていた黒いマントを取りながら出てきた。

前は、冬樹のいう美女でした。

ちくしょう！あのお姉さんがまたくると思っていたのに！！」

「おい、本音がとるぞ。まあいい、一応自己紹介をしよう。さっきも言ったが私は人間で言う神だ。」

「私も神だ」

「おお、お前もか」

「暇を持て余した、神々のあーそーび」

やべー、ただの変態かと思ったけど以外にノリいい奴だ！ネタが古すぎて寒くなったが。

おっと、それより狂のことを言わないとな。

「お前が俺と同類ということはよく分かった・・・それより狂を女神に言われた通り穴に落としたが、一体どうなったんだ？」
肩を組みながら、そう聞くと、

「うむ、言われた通りにしっかりやってくれた様だな。なに、心配することは無い。奴は元の所に戻っただけだ。」

ハア？

「お、おい！どうゆうことだよ！話が違っぞ！！」

たしか昨日伝えてきた（俺にとっての）女神はたしか・・・
・・・やべえ、ずっと（俺にとっての）女神のこと見てて、

穴に落とすことしか聞いてなかった。

「なんだって？じゃあ、あ奴はちゃんと話してなかったのか？そんな事は無い筈だが・・・まあいい、お前もこの世界くに行ってもらうからな。ちなみに拒否権は無い。」

少し悩んでいた様子の同類は、いきなり俺に向かってピシッ！と効果音がつきそうな勢いで、思いつきり俺を指差しそうやってきた。

「どゆこと？」

そう言った瞬間、足元に穴が開いた。

「どゆことおおおおお・・・」

まさかの俺まで落ちるとは・・・
そう考えていると俺の体ぐらいの大きさの岩が落ちてきた。

えっ？

「ちよ、おま、俺は野球ボールほどの大きさの奴しか投げてねーよ！ーい、いや、マジでそれは危コ（ドゴッ）」

氷野がログアウトしました。

いちわ！（後書き）

無理矢理すぎた。

にわー！！（前書き）

8割ネタ

にわー！！

- 狂視点 -

「ん・・・？」

起きてみると、周りは咲き乱れた鮮やかな桜と、一本道しかない場所だった。

「・・・どこどこ？」

たしか自分は、コンビニに行こうと氷野に言われ無理矢理手を引っ張られ、そのまま玄関まで連れてかれて、ドアを開けると其処にはなぜか大きな穴があったはず。

その後後ろを振り向くと、たしか（ドゴーン??）

「え？え？なにこと？」

重要な所で思考が切られたが、今は謎の音の原因を調べなくてはいけない。

かなり近くで落ちたようで、すぐにそれは見つかった。

それは岩石、石ではなく（ここ重要）岩石が落ちてあった。

なにか下で潰れているのがあるが、気にしない気にs（ガシッ？

「そこは助け出すとこだろーがあああ！！」

無視しようとする、突然岩石が動き、その下に潰れていたであろう人物に手を掴まれそう言われた。

「チッ・・・そのまま潰れて死んでればよかったのに（大丈夫？冬

樹。怪我は無い？」

「おおおい！考えている事と言ってる事が逆だあ！！」
しまった、つい心の本音が前にでてしまったようだ。

「じよ、冗談だよ（汗）本当に大丈夫？」

「ああ、でもなんで落とされたのが思い出せねえw」

バカだ、バカがいる。

「本当に大丈夫なのかね・・・まさか僕を落とした理由も忘れてたりする？」

「ギクツ！そ、そんな訳ねーだろ」

今自分でギクツ！っていったよこの人。そう言いながら、冷や汗をかいているバカ。

こういう時は無言の圧力を掛けてやればいい。

「・・・（「」） ジーーツ） こんな顔をしている（「」

そのまま絶対零度の目で見てみると、

「すみませんでしたー！！」

たしか学校の男子がやっていた、ジャンピング土下座なるものをしてしながら、謝ってきた。

えっ？なぜ男子がそんな事をしていたかって？
簡単に説明すると、

男子、クラスの女子のスカートを覗き怒られる

男子、その場でジャンプし、土下座の体制をとる

女子、「舐めとんのかああ！！」と言い、男子のボディに蹴りをいれる

男子、「ぶるうああああああ！！」と言いながら顔を痛みで歪ませ、その場で転げ回る

・・・というようなことがありましてね。

そんなこんなでそれを知っていた僕は、その女子と同じように冬樹のボディに蹴りをいれた。

ドゴツ！「はう！？（バタツ）」

なぜか倒れ伏す冬樹。一体どうしたというのか、ただ靴の中に重りを入れていただけなのに。」

ガバツ！「それが原因じゃああ！！！」

また思っていたことがでていたらしい。すぐに復活した冬樹が、いかに私怒っています的な顔で言ってきた。

「でもそれぐらいのことをしてるよね。」

そう正論を言うと

「・・・それもそうだな、悪かったよ」

少しシユンとしながら謝ってきた冬樹。

ちゃんと謝ってくれたので一応許すことにした。

もう一度ジャンピング土下座で謝ってきたら、重りを増やして蹴れたのに。

「まあ、今回は許すよ」「本当か!?!」「うん、うん、でももし思い出したらちゃんと教えてよね。」

「おお、心の友よ」（泣）

某ガキ大将のようなことを言って、抱き着いてくる冬樹。

正直言って暑苦しいことこの上ない。

・・・待つてよ? たしかあのガキ大将がこのセリフを都合よく使う相手は、ヘタレメガネ君のはず。

という事はこの場合僕はヘタレメガネ君の役まわりということ?

・・・解せぬ・・・

ま、まあこんなひねくれた考えはもうやめよう、僕はあの青ダヌキに頼るほどヘタレでは無い、はず・・・

閑話休題

無駄に時間を使ってしまった。危ない危ない。

そう思い僕は冬樹を引き剥がすと

「・・・そんな事よりここどこだよ？ケータイも繋がらないしよ・

」

同じことを考えていたのか冬樹は圏外と映されたケータイを見せながらそう言ってきた。

「ねーほんと、一体ここはどこなんだろう」

そう相槌をうち、僕達は桜に挟まれた一本道を歩きだした。しばらくして、おもむろに振り向くと

「くんには（ニコッ）」

「うわぁ！..!」

後ろに、桃色の髪の毛、とても綺麗な女の人が微笑んでいた。

にわー!! (後書き)

後悔してもしきれない

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4959z/>

吸血鬼に憑依しちゃった！！

2011年12月17日12時07分発行